

平成27年度 第4回講演会 記録

日 時	平成27年5月23日（土） 13：00～16：00
会 場	国民会館 大ホール（武藤記念ホール）
講 師	リアルニュージーランド代表 藤井 巖 先生
演 題	ニュージーランド 自然と人間の距離
備 考	参加者数 175 名、 記録 樋野 巧

1. 自己紹介：

私は広島・竹原生まれだが、祖父が京都市に在住、近大で教鞭をとっていた関係で年2回は京都に来ており、関西には縁がある。鹿児島の高校、東京大学を卒業後、16年間外資系証券会社に勤務したが、「何か違う」と感じ退職。その後2年間働くことをやめ、2006年10月にニュージーランド(以下NZと記す)に移住した。NZには、これまでと違ったものがあると感じ、多くの人々に私と同じ思いを持ってほしいと思い、2007年4月リアルニュージーランド社を設立し、旅行や留学生のサポートなどを行っている。私が感動したNZの空と雲を見てほしい。



藤井 巖先生

2. NZについて：

公用語は英語・マオリ語・手話。NZの国名は、1642年に発見したオランダ人に因み同国のジーランディから名付けられた。ポリネシア系のマオリ語ではアオテアロアという。アオは雲、アオテアは白、ロアは長いを意味し、長く白い雲の国を表す。国土面積は日本の3/4、人口450万人、火山・地震が多い。羊約4000万頭、牛約2000万頭。鳥の固有種は世界トップクラス。羽のない鳥はキーウィを始め6種だけが棲息している。国土の1/3は保護区、国立公園は14、自然保護区は100以上、トレッキングコースの整備は13000km。一人当たりのヨット・カヤック・自転車の保有台数、及びランニングシューズの売上げ高世界一。NZ人は自然が好きで、遊びに真剣に取り組む国民性。NZは新しい国で、全員が移民、アドベンチャーの国柄。ボーダーに対する考え方は日本とNZでは大きく異なる。



シーカヤック

3. NZの自然に対する取組：

NZの教育は、NZ社会の自然に対する取組と密接に繋がっている。自然と触れ合い、その中にいることを上手にやっている。日常的に生活の中に「遊び」として取入れ、自然を感じている。 ①自然の中で遊ぶ ②自然と共に遊ぶ ③自然に遊ぶ NZ人は、自然とともに遊ぶことを生活の慣習にしている。

4. NZの自然の考え方：

- ① アドベンチャー・エコツーリズムの先進国で、日本より何十年も前から取り組んでいる。
- ② 自然と関わるインフラが国の施策として整備されている。NZが誇る自然保護局(注)はコース整備等にタッチしている。

- ③ ネイチャーガイドのクオリティは世界のトップクラス。
- ④ 自然保護の意識が高い。
- ⑤ (自然に関わる活動での) 事故等に対する考え方が進んでいる：現地での活動中のケガ等の治療は無料のシステム。
- ⑥ 危険な動物がいない。
- ⑦ 自然との共生：NZ は物質的には豊かではないが、自然の中で真剣に遊ぶ工夫をする。自然に対峙するのではなく、属しているものとして、自然の一部に我々がいるという感覚（自分達も自然の一部である感覚）である。自然はコントロールできないものとして「見る」から、その中に入って一体となって「感じる」ものとしている。

(注) 自然保護局 (DOC)：今ある自然を保護するだけでなく、どう活用して、皆に触合う場所を作るのが、ミッション。例えば、13000km のトレッキング整備も大切だが、その中に人を入れ、「人々に自然保護をやりたいな、と感じさせ思わせる」ことが狙いと言える。

DOC の活動は、①人が楽しみながら「ハット」(山小屋)の運営に関わる仕組みづくり。②自然の変化の調査。③環境保全 (害獣の駆除等：ポッサムは 7000 万頭生息、イタチの大繁殖)



DOC の自然の変化の調査風景

4. 研修先ネルソンの紹介：

地中海性気候で少雨、晴れ多い。大変住み易く、多様な自然が楽しめる。三つの国立公園に囲まれ、マスカハニー、ワイン、フルーツ等農産物が豊富。シーカヤック・マウンテンバイクが盛んである。

5. リアルニュージランド社の取組の紹介：

12 人の中高生を世話している。半数づつ学校の寮、ホームステイしている。ガーディアン（現地保護者）として、①緊急な問題・事態への対応 ②学校・先生と生徒・家庭とのコミュニケーションの仲介を行う。12 人の半数は日本で不登校となっていた。友人の子供の受入れが口コミで広がり、現在に至っている。

6. NZ の教育：

- ① 教育指標として「テファリキ」というものがある。
- ② テファリキの内容は「遊びの中で成長を促す」で、NZ の自然観と同様で、テファリキの根幹部分とされている。
- ③ 遊びを自分で考えるプロセスで、独自性や創造性を重んじる。
- ④ 好きな事を伸ばす。例えば、NZ での高校 3 年生では評価は好きな 4 教科でそれだけ勉強すればよい。
- ⑤ セカンドキャリア：日本の弱い部分であるが、(失敗にも)もう一度キャリアを作るチャンスがあるか、そういう社会的基盤があるのか・・・NZ にはそれがあり、特筆されるものである。

テファリキに重要視されているのは、地域・家族とのつながりとマオリ文化である。地域・家族のつながりは日本古来のものでもあり、マオリと価値観は似ている。これは、NZ に留まらない考え方と言える。

若い時から、自然の中でのチャレンジさせる機会があることは、NZにとって良いことである。それが無いことが、日本の問題の一つではないか。親の世代も経験が無いため、直ぐ危ないということになる。皆さんも、子供に負けなくらい自然中の入り、子供以上にいろんな経験する必要がある。遊ぶことでみなさんのキャパは広がり、次世代の子供たちが「自然の中で遊ぶ」「感じる」そして「自然を大切に」する意識を目覚めさせ成長して行く」ことになる。子供達に遊びに行けと言う代わりに、皆さんがたくさん遊んで頂くことを期待する。

記録者所感：

知っているようで殆ど知らなかった NZ。講演の内容を少し詳しく書きました。
NZ は穏やかで自然豊かな幸福度の高い国のイメージがありました。火山・地震の多い島国、ポリネシア系先住民と文化等、日本と似ている遠くて近い国、とは言うものの、知らないことばかりだということを思い知りました。
全員移民の人たちで、若い歴史、何事にも、柔軟で前向きで取組が早い NZ。自然破壊の過ちをいち早く改め、自然と人のかかわりを新たに構築した凄い国 NZ。その取組・考え方をさらに知り、学ぶとともに、現地で実体験したいと心から思いました。NZ を好きになってしまいそうです。

以上